

## アフリカ染めた 京の職人

機械で生み出す極彩色のプリント OB有志が紡いだ物語 吉岡悠

2019年8月21日 2:00 [会員限定記事]



エキゾチックな動植物や幾何学模様が極彩色でプリントされた「アフリカン・プリント」。アフリカの人々が着用するこの布地は、戦後の日本で盛んに作られ、輸出された。最大の生産地は友禅染や西陣織で知られる染織の町・京都である。



試行錯誤を重ね、手描きの味わいを出している=京都工芸繊維大学美術工芸資料館（大同マルタコレクション）蔵

当時の京都は、布地に機械で模様を印刷する「機械捺染（なっせん）」の技術が盛んだった。ローラー捺染といって、職人が模様を手彫りした直径20～100センチほどの銅ロールを何本も回転させ、複雑なデザインを多色で染める。

ロール1本を彫るのに1カ月近くかかることもあるので、元をとるため大量生産する。そこで輸出先として目を付けたのが、戦後に次々と独立を果たしたアフリカ諸国。私が技術者として勤めた大同マルタ染工では、なんと1分間に60～80メートルのスピードで毎月100万メートル以上のアフリカン・プリントを作っていた。

私が京都工芸繊維大学を出て入社した1953年ころはその最盛期。2月に面接を終える

と「すぐ来てや」と言われ、卒業前から働いた。大同や商社の営業マンが海外で入手した欧州製のアフリカン・プリントを手本にデザイナーがデザインを描き、職人が彫る。私の仕事は美しく染め上げるための染料の選択や染色方法の開発だった。

大同が得意とした技術が2つある。色を抜いたり、抜き染めしたりする「防染・抜染」がその一つ。写真左の鳥の模様の布地でもこの技術を駆使している。漆黒の背景に混ざらないよう淡いピンク色を出すのは通常の捺染では至難の業である。

もう一つが濃い緑色の「グリーンワックス」という布に使う技術。写真右の布地の緑がそれだ。

ナフトール染料の濃い黄色とフタロゲン染料の鮮明なターコイズブルーを合わせて作るが、元来混ざらない性質の染料を重ねるため、完成まで試行錯誤の連続だった。幾何学模様もまっすぐな線ではなく、虫食いしたような手描きの味わいを出している。アフリカの人々は布地を直接体に巻き付けるため、表と裏の両面に染料を染ませて色を出すのに苦心した。



見本の布地を手手に若い私たちは必死で研究をした。捺染技術に関する日本語の文献はなく、外国語の専門書にあたって試作品をつくる作業の繰り返し。工場は3K（汚い、臭い、危険）職場の典型で、現在は使用禁止の薬品も扱っていた。

それでも、いいものを作るんだという気概にあふれていた。研究の途中経過を聞いた上司は「そんなおもしろいもん、すぐやれ」とけしかける。出来たてほやほやのやり方で1万メートルの布地をプリントする時には手がふるえたが、日に日に力がつくのが実感できた。

2008年、大同は倒産、廃業する。誰でも簡単にコンピューターでプリントがコピーできるインクジェットが登場し、機械捺染の時代は幕を閉じたのだ。さみしさも感じていたある日、大学の同級生で染料屋の萩原埋一君が連絡をくれた。見せてくれた段ボール箱から出てきたのは、大同が世界中から集めた布地と数は少ないが大同の製品の数々。会社の廃業時、これらが処分されてしまうことを惜しんで購入を申し出たのだという。

会社のOB有志で結成した「大同マルタ会」で整理・分類した布地は13年、京都工芸繊維大学の上田文先生のおかげで展覧会として紹介されて内外の注目を集めた。「アフリカプリント」（青幻舎）という書籍にもなった。奇跡的に残った布地を通して京都とアフリカの知られざる関係を伝えられたことを感謝している。（よしおか・ゆたか=大同マルタ会会員）